

映画「葛根廟事件の証言」が制作されて

興安街命日会 代表 大島満吉



映画「葛根廟事件の証言」より

1945
葛根廟
事件とは

2017年5月、望んでも叶えられないであろう、と思われた、ある事件を取り上げた映画が完成した。製作してくれたのは戦争体験を持たない若手映像作家の田上龍一さんである。スポンサーなしで映画を作ることで、作るなんでも映画を作れるんだと考へられてとても考へられない。それが2年の歳月をかけてとうとう完成させたのだ。

年8月、参戦したソ連軍（当時）の侵攻を受けた旧満洲国興安総省興安街（現内モンゴル自治区ウランホト）の住民約1300人が避難途中の葛根廟付近でソ連軍の戦車隊に襲撃され約1000人が命を落とし、翌年の日本への帰国は一割しか帰れなかつたという事件である。

何故、ソ連軍の戦車隊が民間人の団体を襲つたのか、その時に日本の軍隊はどうしていたのか、満洲国軍はどう動いたのか、地元の中国人あるいはモンゴル人等はどう見ていたのか、こうした謎の解明は研究者でないとできないが、こんな事件があつたこと、その事実だけでも記録として残してくれるなら関係者として書かれている例が多い。しかし白濱さんは違つた。総省責任者として市民の退避を見届けた後に、僅かの供を連れて計画通りの行動をとり、後にソ連に連行され

冒頭に大櫛戊辰さんの写経している姿が映る。大櫛さんは当時17歳、生存者として証言している中では唯一成人で、多くの書物を残しており事件を語れる第一人者である。事件のあった8月14日を命日として、毎年慰靈祭が東京目黒の五百羅漢寺で行われており、福岡からの上京が叶わなくなつた89歳の大櫛さんは執念の写経を続けている。

この映画の中で当時の興安総省の最高責任者であった白濱晴澄参与官の長女眞砂子さんが語る開戦当日の朝と混乱の中での退避は圧巻である。

多くの記録では関東軍と高級官吏はいち早く退避し、市民を置き去りにしたと書かれている例が多い。しかし白濱さんは違つた。総省責任者として市民の退避を見届けた後に、僅かの供を連れて計画通りの行動をとり、後にソ連に連行され

証言しているのは11人である

1年後に抑留地で病死してしまう。

家族8人は母親の園さんのもと19歳の真砂子さんを筆頭に弟妹6人を連れて奇跡的に日本への帰還がなった。しかし父のいない白濱家では毎日の生活に窮し、体力の無い幼児3人が栄養失調で次々と死んでしまった。戦乱の中でやっと生き残り、祖国に着いてからも命を救えなかつた母の苦しみを想うと戦争の酷さは筆舌に尽くせるものではない。これが最高責任者の運命であつたことを訴えている。これも知られざる史実であり映像の中で証言している貴重な記録と言えるであろう。

● 次に出て来る伏見恵子さんは、この年の4月に新京の錦ヶ丘女学校に入学したばかりだった。12歳、今の中学生と同じ年齢である。ソ連の開戦を知つて母が興安まで帰ろうと勧めてくれた。家族が一緒の方が良いからと…。その時、恵子さんは私も女学生だから学校の指示に従い学徒の役目を果たしたいと母に言って残ってしまった。その結果が母の行方不明や父の葛根廟事件による死亡につながり、親子の永遠の別れとなつた。一人っ子だった自分に両親は全ての愛情を注いでくれた。その母の言葉に従えなかつた瞬間が取り返しのつかない悔いとして今に残つた。

● 每年8月14日は葛根廟事件の命日であり、この日は必ず慰靈祭が行われている。この日に合わせて伏見さんは毎年千羽鶴を折つて奉納してきた。その1羽1羽に祈りを込めて手折る伏見さんの姿は愛おしい。今年で16回目の千羽鶴である。

● 私（大島）が事件に遭遇したのは国民学校4年生だった。家族は6名、この事件で5名が生還できたのは最大人数でほとんどの家族は1名しか生還できなかつたか、全滅しているのが実態だ。3、4名が生き残つた例もあるが、そのような幸運を得た家族は4所帯くらいしかない。1300人を率いた浅野隊は隊列が2キロから3キロに延びていた。目標としていた葛根廟寺院を目前にして「休憩！」の号令がかかった。先頭集団が草原に腰を下ろした時、山の稜線に停まっていた戦車隊が動きだし、避難民に一斉射撃を加えたのだ。女、子どもが中心の避難民は戦車を目の前にして、動けない人もいた。荷物は棄ても子どもを置いては走れない。幼児2人、3人を連れた母親は走ることもできないまま草原の露と散つてしまつた。

● 我が家では母親と私と6歳の弟と3歳の妹が一緒だった。家を出る時、リヤカーがあつたので沢山の荷物を積んで出たが、途中で何人かの声がかかり荷物を載せて欲しくと頼まれた。山積みになつた荷物と引き換えに兄と私はリヤカーから解放されてフリーで歩けるようになつた。

しかし、途中でリヤカーはパンクしてしまい荷物は放棄され、一番多く持ち出した荷物が一番少ない立場に代わつていた。幸か不幸かその荷物のせいで我が家はバラバラになり兄と警護にあたる父とは一緒ではなかつた。

戦車隊に追われた私たちは無我夢中で草原を走り偶然にあった壕の中に飛び込み戦車の襲撃からは逃れることができた。音が静かになり戦闘が止んだと思つたら、下手の方から3人の兵士が壕の中に下りて來た。私は日本の兵隊が応援に來たものとこりして兵士の顔を見ていた。ところがそれはソ連の兵隊だった。私の背後からマンドリン銃といわれる連射式銃で固まつていた集団を無差別に銃撃したのだ。その音、砲煙、足音は生きた心地がしなかつた。兵士が去つた後も戻つてくるかも知れない不安と再度入つてくるかも知れない不安で動けなかつた。戦車で蹂躪した揚げ句に兵士が下りてきて銃撃されたのでは浅野隊は全滅したのに等しかつた。

父や兄を探しても見当たらぬ。1キロ2キロの平面を探すことは不可能だ。

生き残っている人そのものが見当たらぬことで、生き残ったというより取り残されたという気持ちのほうが強かった。朝から何も食べていな上に歩き疲れ、父や兄を探せないことで不安が募るばかりだ。母は私に「どうしようかね」と言葉を発した。もうどうしようも無い。死ぬより道が無いことを私に告げる意味だった。父や兄が見当たらず、食糧もない。女子どもだけで逃げる方法なんて無いだろう。第一行く当てがない。興安街は暴動が起きていると云う。目的の葛根廟にはソ連兵が待ち受けている。広野を行つても結局野垂れ死にするのが見えている。中國人に会つても言葉が分からぬ。仲間がいないこと、行くべき目標がないことは絶望を意味している。遂に母は覚悟を決めた。傷ついて動けない在郷軍人の刀を借りて妹美津子の首に刃を当ててしまつた。「ごめんね、美津ちゃん、お母さんも直ぐ行くからね」鮮血がはり、美津子は死んでしまつた。私は後ずさりしてその場から離れた。死にたくない…。

●大楠戊辰さんの証言は當時独身だったので、家族との行動は無く、避難行動の

編成とか職場関連とか襲われた時の心理状態等を証言している。

●佐藤雅寛さんは父とは一緒ではなく、母と妹と叔母と行動を共にしていた。結局父とは会えず、夕刻になって4人は遭難現場から脱出したが、生きる望みを失っていた。地元民の物盗りの姿を見ては恐ろしさが増すばかりだった。

数人の女性達も加わり、人数は増えたがこれから逃避行をリードしてくれる人はなく、近くに流れている河を見つけて水死の道を選んだ。だが水が浅く、ずぶ濡れになりながらほとんどの人が死に切れなかつた。夜道を歩き一発の銃声に驚いて各自が低い姿勢で隠れたのが仇となり、母と妹とその時にはぐれてしまい、そのまま永遠の別れになってしまった。

その後は叔母と行動を共にしたが、地元民の妨害にあり、その時の悔しさから雅寛さんが追つて來た中国人に口答えしたことで怒りを買い、頭と肩を切りつけられた。国民党学校3年生のできことである。

●高田京子さんは興安街に住んでいた訳ではない。鉄道の終点に当たるアルシャン（阿爾山）から南下して興安街に下車してしまつたのだ。父が経営するホテルが興安街にあり、その従業員と一緒に行動するはずだった。しかし、その後に

来る列車は無く、避難行動するにも他の隊は先行して、結局残つた浅野隊に加わるしか道がなかつた。下車しなかつたらこの事件に遭わなかつたのに運命のいたずらだったのかも知れない。

幸い高田さんのグループは大きな被害に至らず、従兄弟1人が弾に当たつて犠牲になつただけで助かった。しかしその後の逃避行は難航を極め、半数が途中で行方不明になるなど日本にたどり着いたのは8名だけに減つていた。

残留孤児3人の証言

●石田たか子さんは父が召集されて母子4人の逃避行だった。

たか子さん5歳、弟は3歳、その下に妹1歳が母におんぶされて葛根廟へ向かっていた。たか子さんと弟は馬車に乗せられていた。「戦車が来た時は母も近くにおり、周りがばたばたと倒れた時に、母は1歳の妹を刃物で切り、私たち2人も毒薬を飲ませて自分も口に入れました。私はこれが毒薬と分かり口から出すと弟の口に指を入れて吐き出させました。直ぐに母は息を引きとつて死んでしまい、

「私は弟を連れて大人を探して歩きました」

した。幸いモンゴル人が私を発見してくれたのです。連れて行かれた場所で、ここで待つように言われて待っていると眠くなり、その場に寝込んでしまいました。気がついた時、弟の姿がありません。私は夢中で探しましたが見つかりません。困り果てていたところに大人が来てくれ、私はおんぶされて移動したのです。その時黒い動く物を見つけ、大人の人にそこへ行くよう頼んだらそこには動けなくなつた弟がいました。

モンゴル人のお陰で助けられました。学校に行く時は遠くで大変でした。大きくなると結婚相手を押し付けられて苦労しました。暴力を振るう夫で子育ても苦労しました。岡本さんのお世話で日本に帰れて、親戚中が大切にしてくれました。今は中国にも日本にも子ども達がいます。今が一番幸せです」

● 依田照子さんは長女で1年生でした。父は召集されており、母は4人の子どもを連れて逃避行を余儀なくされていた。「戦車が来た時私は走つて逃げましたが小さい子を連れた母とはその時から行方が分からなくなりました。

煙の中に逃げこんで自分は助かったのですが、母の姿はなく、何処を探しても死んだ人ばかりでした。

私は大人の人を探して一緒に連れて行って下さいと頼みました。その時は可哀想にと云つてくれたのですが、私が眠つていると云つてくれたのです。誰もいなくなつて一人ぼっちの私は食べ物を探すためにあちこち歩きまわるうちに親切な中国人に逢い、そこで学校に出して貰うようになりました。

日本との国交回復があつてから、日本

の情報を求めて里帰りした時、初めて母が生きて日本に帰つたことを知りました。しかし体力も無く、3人の子どもを失つた悲しみと、父が抑留されて帰つていなことなどあり、居場所を失くして半年ほどで亡くなつたそうです。

母も苦労しましたが、今の私は日本人でありながら中国人でもあり、私の娘も中国人であり、日本人なのです。家族の

分断もある戦争はとても悲しいものです」

● ウユン（烏雲）日本名立花珠美さんは中国語で証言し日本語訳はテロップで流れます。

「戦争で避難の時父は出張で家を留守にしていました。母は5年生の姉をはじめ1年生の私ほか小さい子がまだ3人居て6人で汽車に乗り込みましたが、出張中の父がこちらに向かって汽車に乗つて来るとの情報があつたようです。

父が居なくて家族6人での行動は母の負担が大変です。そこで列車を降りて父を待つことにしたのです。ところが次ぎの列車は来ないことが分かり、父も興安街まで帰つて来ることができませんでした。移動手段を全く絶たれた私たちのは最後の避難団である浅野隊に加わるしかなかつたのです。

戦車が来た時、姉は走つて壕の中に飛び込んだのですが、後から飛び降りて来た人の下敷きになり死んでいました。人は馬車に乗せられていたのですがどこに行つたのか見つかりません。母は平常心を失い小さい子をナイフで切りました。驚いた私はその場から逃げたのです。でも周り中が死人と重傷者ばかりで怖くなり母の所に戻ると、母は苦しそうな顔をして私に何か言いました。

喉から血を流しながら手元の袋から家族の写真と住所の書かれているメモを渡しながら父を探せと言いました。母が息絶えても私はそこから離れることができません。幾日か経ち私は意を決し大人を探しに歩き回りました。橋の上で見つけてくれた人の世話で食事をさせて貰いました。家族5人がこの地で命を失い一人ぼっちの私も後にモンゴル人の父に育てられたのは幸運でした」

元の人の祈る場面も本物です。
毎年行われる慰靈祭の様子も入っています。戦後70年を記念して帰国孤児を招き「内蒙古帰國者と語る会」の催しも入っていました。一般的の民間人だけでこのような行事を重ねて70年というのも特筆すべき団体でしょう。

國は満洲国に関する史実の自然消滅を待つ姿勢に感じられます。葛根廟事件は日本国でもロシアでも中國でも表に出ません。些細なことなのでしょうか。

このような史実は風化させず記録して残すべきと考えます。政治家の方にはこのような戦争悲劇を実際に見て日本の政治に取り組んで欲しいのです。

最後に「ゆふいん文化・記録映画祭」で第10回松川賞受賞が決定した作品であることを申し添えます。また国際善隣協会で行われた6月30日の試写会では35人が見てくれました。2回目の試写会7月24日には50人の来場者があり多くのコメントが寄せられました。

ト会場などで取り上げて頂くのを待つのみです。

この他に特異な遺族の一人として高知県の青木浩氏が現場付近で父の写真を前面がある。八十路を超えて亡き実父への情愛が胸に迫る。

●藤原作弥氏は父が軍官学校の文官教授であった。軍家族の一員として退避する幸運を得て難を逃れた証言をしている。「一步間違えば自分もこの事件に巻き込まれていたはずであった。生き残ってこの事件を知った以上、犠牲者への追悼は欠かせない。また一ジャーナリストとしての事件を知らしめる義務もある。大きな事件なだけに自分が生き残ったといふうしろめたさがある」と述べている。

この映画の意味するもの

11人の証言は戦争の実態をよく表しています。葛根廟におけるソ連兵の襲撃場面こそありませんが、こんな殺戮があつたという本物の証言です。

写真や書物による史実も参考になりますが、映画は肉声と表情でその場を写します。葛根廟裏の遭難現場にも入って撮影されたものです。

葛根廟裏の遭難現場にお参りする関係者や地元の人々の証言は有り難いが、犠牲者一〇〇〇人の声も何処かで響いて欲しい。ドキュメンタリー映画は一般の映画館で取り上げにくいのが現実です。スポンサーなし、チラシ・ポスターなし、音楽の力も借りずに完成したとは！

娯楽映画のような見どころや感激を味わうことはないのですが、歴史を勉強する一端になります。

小劇場・公民館・会議室・他の映画との抱き合せ、戦争を知らしめるイベン

ト上映を希望する場合の連絡先
興安街命日会 大島満吉 練馬区西大泉
5-6-8 TEL 03-3924-7764
筆者略歴（おおしま まんきち）
群馬県生まれ。
国民学校4年生の時に葛根廟事件に遭遇。
会社員を経て平成14年父の後を継いで
興安街命日会の代表。
『葛根廟事件の証言 草原の惨劇・平和
への祈り』564頁の冊子編集。
事件のことを書いた『流れ星のかなた』
私製本 上下巻がある。